

ぶらす

出居清太郎ワールドへのご招待

No.104

2017・春

苦難の時もほほえみを

(1) 変哲のない一日一日のようだが

立派な人生を歩んでいる人も、だんだん落伍していつている人も、やはり三度の食事をし、仕事をしたり遊んだりしている。人生はほとんどこんな一日から成り立っています。ちよっと見た目には、二人の一日に大差はありません。それがいつしか大きな差になる。

それはやはり、生活の「コマ」コマが、魂と心と肉体の生成発展になっているかどうかの違いなのです。お酒一杯のむにし

ても、心身を養ったか暴飲になったかの違いです。苦しい時にもほほえみを失わなかったかどうかの違いです。

青年は将来が長い。ですから一日を大切に思う心が少ない。ガンと宣告され、残り少ない毎日を大切に生きた方の記録があります。しかし、明日のある今日一日も、明日のない今日一日も、その大切さに変わりはありません。かけがえのない今日一日を、新しく修め養つよう努力しなければならぬのです。

(出居清太郎先生の言葉から)

いつも一緒にしゃべったり、ふざけ合ったりしていた友人が、ある時大きな成果を上げて、いつの間にかこんなに力をつけたんだらうと驚いたといった経験はありませんか。

彼は、私の知らないところで大きな努力をしていたのでしようし、外見は同じように見えた勉強や練習の質が違っていたのでしよう。

子どものころ無意識の中で食べていた一日二日の食事が、知らない間におとなの身体をつくったのでした。しばらくぶりで会った親戚の人には「大きくなったねえ」と驚かれますが、家族や本人は変化に気づくことはありません。

毎日毎日の食事が、三十年、五十年と続けば、それがその人の健康や体質や病気やに影響を与えるに違いないでしよう。

同じように、毎日毎日の感情や思い、行いの積み重ねが私たちの精神や心をつくっていくのではないでしようか。

「苦しい時にはほえみを失わない」「ことは難しいことですが、苦しさに対して、歯をくいしばるだけの対応と、ほえみを失わない対応と、その二つの積み重なるの結果は、のちに大きな違いになるのでしよう。ほほえみを失わないことの積み重なりは、やがて温かい心と真に強い精神をつくりあげるのではないでしようか。

(2) 苦難を乗り越す

苦勞かん難する人は辛いでしよう、絶え

ず肉体を患う人は辛いでしょう、借金の言い訳、間借りをして追い立てられる、それは辛いでしょう。しかし、そのかん難苦勞があればこそ前進できる、改革できる、改造ができる。

私の人生行路はなかなか厳しく、死を決心したこともあります。そうした苦難にあった時、迷いの心、弱い心が起きたが、そ



カット 齋藤啓子

れを思い直し、思い直しして乗り越えていくのです。

苦難ということではなくとも、人の言葉によって心がくもったり傷ついたりする。頭から下肥をかけられたこともある。この馬糞野郎と罵倒されたこともある。その時大根でも肥をかけられて太る、これで私の魂も太って有難い。馬糞をやるう(野郎)とおっしゃれば、喜んでいただきます。そして、ジャガイモの肥料に置いて帰ります(笑)。きつい言葉をかけられると、よく励ましてくださって有難うと感謝する。苦勞しているときは、自分のよい歴史をつくっていると思えばよい。

(出居清太郎先生の言葉から)

最近、かつての教え子から話を聞きまし

た。その人は、頭痛がひどくて、いろいろ あたたかさからなのではないでしょうか。

と体調不良があり、忍耐力もなくなり、自制心も失って、母親としょっちゅう言い争いになるということでした。その人の頭痛

編集後記

は、私の知っている頭痛などはまったく違つものでしょうが、私には想像もできないし、私がおかをして上げられるということでもなく、ただただ、頭痛や体調不良の

この冬は中国地方の日本海側が大雪だということ。南国出身の私などは、雪かきの大変さを知りませんので、ただご苦労をお察しするばかりです。

緩和と、心おだやかに生きる意欲を持つてくれることを祈るばかりです。

昨今はテレビやインターネットによって、さまざまな映像を見ることができま

人は、苦難に立ち向かう力を、生きる力をどこから与えられるのでしょうか。それは神からと一言でいってもいいでしょう

が、実は生の体験が少ないということが現代人にとっての大きな課題のような気がします。

次号は10月1日発行です。(H・Y)

平成 29 年 3 月 1 日発行

ふゆのあり 687 号付録

ふらす α 平成 29 年春号(通巻 104 号)

編集人 山本博也

発行所 〒170-0011

東京都豊島区池袋本町 3-11-1

修養団捧誠会 青少年委員会 TEL 03-3397-1149